東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

特色ある学校づくりと教育課程編成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田,正人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174178

特色ある学校づくりと教育課程編成

前広州日本人学校　教諭
北海道雨竜郡幌加内町立幌加内中学校　教諭　高　田　正　人

キーワード：行事精選，小中一貫，教科担任制，外国語教育

１．はじめに

広州市は中国の南部広東省の省都であり，華南地区で最大の都市である。北緯23度に位置し，亜熱帯気候に属する。年間の平均気温は22.8度，平均湿度は77パーセントである。高温多湿で長い夏と低温少雨，零下にはならない暖冬が特徴といえる。人口は約1,200万人。古くから海外貿易の中枢として栄え，今でも商業都市として発展しており，年二回開催される「広州交易会」は中国最大の輸出商品商談会で，世界各国から多くの関係者が集まりにぎわう。また，日系の企業や工場は広東省内で約2,000社（2012年10月），企業進出が多い地域となっている。広東省内の在留邦人は18,193人（2012年10月）で広州市では5,000人と言われる。

広州日本人学校の児童生徒数は421人（2013年5月）であるが，インターナショナルスクールなどに通う日本人が100名程度いると言われる。必ずしも現地に日本人学校があるから通わせるのではなく，海外を転々とする環境や国際化による英語の必要性などで保護者や子どもの通学への考えは様々である。よって，広州日本人学校ではさらなる特色ある学校づくりとともに，児童生徒確保が課題となっている。特色ある学校づくりに向けての教育課程編成について，教務として関わった平成25年度の動きの概要をまとめる。

校舎外観

２．教育課程の編成

(1) 平成26年度の教育課程編成の基本方針

1　行事の精選と授業時数確保	2　学力向上の到達目標を数値化	3　外国語（英語）教育の充実
4　体力向上の推進	5　小学部5・6年生の完全教科担任制の実施	

今まで積み上げてきた土台を基本としながら，現在の広州日本人学校の現状と今後の課題から，以上の5点を重点として，平成25年度に編成を行った。

(2) 行事の精選について

日本人学校は小中一貫や海外の特性を生かした多くの行事があるが，それらを小学部と一緒に行うと中学部は授業時数をいかに確保するかが課題となる。また，中学部は進路があるため，適切な時期の行事設定も重要となる。さらに，児童生徒確保のために広州日本人学校としての魅力ある特色を出すことも必要となる。

様々な課題を踏まえた中で，以下の観点で行事の精選を行った。

ア）中学部の授業時数および外国語教育の時間確保のための行事精選。
イ）1学期は運動会を中心とした体力向上の推進を図る学期，2学期は文化的行事や学力向上を図る学期としての年間をも見通した行事の位置づけ。
ウ）日中関係や現地理解教育を考慮した上での宿泊的学習の時期と場所の検討。
エ）小中一貫や現地理解教育の特色づくり。

①行事精選においての観点（○は維持・●は精選検討等）

小中一貫の特色づくり	○運動会　○縦割り集会（昼休み）　○委員会活動（小5～中3） ○中3と語る会（小6・中1・中3）
	●JSGまつり　●活動方針発表会　●学習発表会（小中分離）
国際理解 現地理解教育	○東風東路小学校交流会（小：年2回）　○伝統文化を学ぶ会 ○カレン大学交流会（中：年2回）　○校外学習 △宿泊研修・修学旅行（場所・日程）
	●中3職場体験学習（日数減）
生徒指導	○生活面談（年3回）・大掃除（3回）
安全対策	○避難訓練（年8回）

大小様々な行事を洗い出すと100ほどの行事があった。行事を検討していく中で，たとえば縦割り集会や中3と語る会など，安易に削ると小中一貫の特色が薄れるものや，東風東路小学校交流会・カレン大学交流会などの在外ならではの活動，生活面談や避難訓練のような生徒指導・安全対策上必要な取組など，全体を見渡しながら精選できたのは7つほどであった。結果，中学部で確保できた授業時数は概算で20時間弱であったが，授業時数確保においては一歩前進となった。

②宿泊学習

ア）修学旅行
　小学部6年（6月西安方面2泊3日）→香港・マカオより変更
　中学部2年（10月北京方面3泊4日）→シンガポールより変更
イ）宿泊研修
　小学部5年（6月中山方面1泊2日）→香港より変更
　中学部1年（9月深圳東涌1泊2日）→中山より変更

現地（中国）理解をメインにして宿泊学習の検討を行った。安全面からは反日デモが起きやすい7月や9月中旬を避けること，気候面（暑さや寒さ）も配慮した上での決定となった。

平成26年度年間行事予定

(3) 外国語（英語）教育の充実について

現在の世の中は英語が必須なのは言うまでもない。中国においても同様である。広州でもインターナショナルスクールに通う日本の子どもたちが多い。児童生徒確保のために，広州日本人学校としての魅力ある特色づくりの一つに，外国語（英語）教育の充実があげられる。

①外国語（英語）教育の充実の概要（広州日本人学校HPより抜粋）

○中学部3年までの実践的英語の指導により，スピーキング力やリスニング力の向上を図り，実践的コミュニケーション能力を育成するために，小学1年から中学3年までの全学年で，外国語（英語）教育の授業時間を週1時間増やします。

○より早い時期から英語に触れられる指導により，英語に対する抵抗感を減らし積極的に学習に臨む姿勢を育成することをねらいます。

○小学校段階から英語教育を行うアジア諸国に対等できる児童・生徒を育成することをねらいます。

○小学部1～4年生（2時間），小学部5・6年生（3時間），中学部全学年（5時間）の全ての外国語（英語）指導にネイティブの先生を活用します。この際，小学部は各学年のレベルを考慮し，1学年を3クラス編成で行うことで，少人数による個々にあった指導を目指します。中学部は4時間を学級単位で教科書を中心に授業をします。1時間は英会話の時間とし，1クラスを2グループに分けて授業をします。

外国語（英語）教育の充実・推進により日課表を検討した。小学部1・2年生では，外国語（英語）の時間が1時間増えても週29時間で対応できるが，中学部では週29時間の日課にさらに1時間英語を入れる（増加させる）ことは難しい。また，在外特有の安全管理面とバス運行の面から（本校は市街地から遠隔地にあるため），小中一斉下校をさせている条件により，小学部・中学部で時間差がある日課表を組むことはできない（部活時は除く）。検討の結果，小学部低学年には負担をかけるが，授業時数が全学年1時間増加するので月曜日を6時限とした（週29時間から週30時間になる）。

②日課表編成上の職員確認事項～英語（英会話）の1時間増による30時間の確保のために

○月曜日に6校時を行う。

○小と中，同じスタートタイムに設定（月曜日は小中時程が同じなので，英会話等の教科担任制が可能となる。小中乗り入れの先生がスムーズに移動できる）。

○小は月曜日のみ，休み時間が15分になる。中休みも15分。

○完全下校15時15分。職員会議は15時30分から始める。

○火～金は昨年同様の日課。ここも月曜日と同じスケジュールになると，小学校が常に休み時間が15分になってしまい，子どもの生活リズムが崩れる可能性も。注意点は，スタートタイムがずれるのは奇数の校時（1・3・5）のみ。

○部活動は3回行う。時間短縮を行い，終了時刻を16時50分。活動時間は約1時間で効率的に行う。会議時間や学年・分掌時間の確保。生徒の健康管理・安全管理のため。

（4）小学部への教科担任制の導入について。（1～4年は技能教科，5・6年は主要教科を含む）

本校では以前より小学部は全学年で音楽・図工専科教員による教科担任制を行っており，他にも教員の持ち時数の関係で教科担任をとる学年・教科もある。その上で，より内容が高度になる高学年で教員の専門性を生かした質の高い指導を行うことで学力向上を図る目的で，また，専門的な幅の広い指導を行うことで，児童の学習意欲の向上や個々の個性・能力の向上を図ることを目指し，小学部5・6年生で完全教科担任制をすることとなった。ただし，必ずしも教員が適正に配置されない日本人学校の環境下で一致協力して進めるために，多くの配慮事項を確認しながら，教科担任制へのスムーズな移行を進めた。

①小学部5・6年生教科担任制の配慮事項

〇教員の意識や気持ちに対する配慮
～教員間の公平感を考える。時数バランス（数字の平均化か，実質時数か）
〇学級担任の確保
～特に中学部は持ち時数にしばられないように…。教科担任制ありきで，軸となる担任不在や担任人事が最後にならないよう。
〇持ち時数のバランス
～中学部教員の負担増，数字の平均化か，実質時数か，1～4年生中心の先生と5年生以上の先生持ち時数の検討。専科の先生の持ち時数。
〇教科担任制の優先的教科
～教科担任制に関わり小6担任としてどの教科を受け持つか。また，小6担任の持ち時数。
〇1～4年生と5年生以上の違い
～一人の先生が最大限学級を見る学年と多くの先生が学級を見る違い。
〇教員の確保
～学級数増と教科担任制における必要な教員（教科担当）の確保

3．おわりに

短い期間で大幅に教員が入れ替わる日本人学校において，一年弱でこれらの教育課程の大胆な変更に向けての準備はかなり労力を要した。そして，国内以上に制約された環境・勤務の中，全体確認をしながら編成を進めていくのは細かな配慮や綿密な計画が必要だったからである。また，今年度の教務担当も頭を悩ましながら，教育課程を推進していることと思う。

今回の教育課程の編成が，特色ある学校づくりにつながっているとともに，海外の厳しい環境の中で生活する児童生徒一人一人にとって，日本人学校が楽しい学びの場で，夢や目標に向かって日々成長している場になっていることを願う。

中庭のバナナの木